

令和6年度 千葉県高等学校総合体育大会 サッカーの部 総評

【はじめに】

令和6年5月18日(土)、6月1日(土)、2日(日)、8日(土)、9日(日)、12日(水)、16日(日)の7日間をかけ、千葉県高等学校総合体育大会サッカーの部が行われた。先に行われた一次トーナメントの結果により勝ち上がった16チームによる決勝トーナメントにて、全国総体千葉県代表の1枠をかけ大会を行った。

ベスト4進出校は流経大柏、日体大柏、東京学館、市立船橋の4校。準決勝・決勝は東総運動場にて行われ、優勝が市立船橋、準優勝が流経大柏という結果で令和6年度千葉県総体の幕が閉じた。優勝した市立船橋は令和6年7月27日(土)から行われる『ありがとうを強さに変えて 北部九州総体2024』に出場し、サッカーの部は福島県にて開催となる。

3年連続31回目の全国総体出場となった市立船橋は、昨年度の全国選手権での活躍が目立ったFW⑩久保原の決定力はもちろん、FW⑨伊丹はハードワークもさることながら得点力もある。DFラインはGK①ニコラス、DF④ガブリエル、DF⑤岡部を中心に統率を図り、MF⑦峯野の献身的且つ狡猾なプレーでゲームコントロールする。SB⑬渡部のキックも多くの決定機を演出した。また、試合終盤にかけての勝負強さは群を抜いていた。

【今大会を振り返って】

今大会の決勝トーナメント進出16校は、公立5校・私立11校であり昨年と同様である。所属リーグとしてはプレミア2校・1部7校・2部6校・3部1校であった。準決勝は流経大柏対日体大柏、東京学館対市立船橋で、関東大会に出場した習志野はベスト8、検見川はベスト16で敗退となった。千葉県ベスト16進出チームのレベルは拮抗しており、県2部リーグ所属チームの中でも決勝トーナメント進出できないチームも珍しくはない。また、千葉県は2018年度からプレミアリーグEASTに3チーム(流経大柏・市立船橋・柏U-18)出場しており、全国トップの数である。また、高体連チームから2チームの出場は全国で千葉県のみである。そのことから千葉県で頂点に立つことは容易ではないことがわかる。

今回ベスト4に進出したチームは、昨冬の第102回全国高校サッカー選手権大会にてベスト4となった市立船橋(優勝した青森山田にPKにて敗退)や、令和6年度県総体予選決勝時プレミアリーグEAST首位の流経大柏、県1部リーグ首位の日体大柏は順当であるが、2部リーグ6位である東京学館の魂のサッカーの快進撃も見られた。

準決勝・決勝の3試合は合計8得点である。(市立船橋4得点、流経大柏3点、東京学館1点)を分析するとCK・FKからの失点は少なく、カウンターに対してのリスクマネジメントの甘さや、クリアした後のマークミス(特にファー側のマークの甘さ)からの失点が多く見受けられた。

残念ながら準優勝となった流経大柏のインテンシティはずば抜けており、優勝した市立船橋でさえ流経大柏のプレスに対してビルドアップを狙い続けることは難しかった。逆に

流経大柏は自陣から幅と深さを使い、長短のパスの質も高いため、相手チームはボールを奪う場所を限定しなければならない程の質の高さがあり、選手個々のストロングポイントを活かしながらゲームを進めていたように思う。しかしながら決勝戦は、市立船橋の勝負強さが際立っていた。王者“市船”の勝者のメンタリティは一朝一夕では獲得できないはずであろう。市立船橋にはぜひ昨年度の全国総体ベスト8を超える結果に期待したい。

【大会運営について】

今大会は、6月2日（日）に予定していた3回戦（千葉日大一高会場）第2試合が雷雨により延期となり、6月4日（火）に試合後半から再開となり、会場をフクダ電子スクエアに変更することとなった。できる限り同条件での再開を目指すものの、ピッチが変われば風向きも変わる等、同条件とは言えない中での再開は残念であった。

令和5年度より、準決勝と決勝を土日連戦ではなくなり、準決勝を6月12日（水）、決勝を6月16日（日）と中日を設けての開催ができています。県代表1枠をかけて行うということ、暑熱対策を考えても、ありがたい判断である。今大会は中3日で行うことができたこともあり、両チームは強度の高いゲームを維持することができたのではないだろうか。

また、昨年が続いて声出し応援ができたことが、ピッチに立つ選手のエネルギーとなり、気迫溢れる試合展開ができたのではないだろうか。

今大会を無事終えられたこと、また、大会の運営に携わっていただいた全ての方々に感謝の意を表すとともに、優勝した市立船橋高校の全国総体での躍進を期待し、令和6年度千葉県高等学校総合体育大会サッカーの部の総評とさせていただきます。

千葉経済大学附属高等学校 奥寺亮介